Marco Gallery

PRESS RELEASE

Group exhibition

“公園-記憶の合流地点 /the Park-Crossing Memories”

横手太紀 KINJO KOMI 和田峻成 葭村太一 髙橋穣

2024/5/19-6/25

Marco Gallery 1F,4F

この度 Marco Gallery ではグループ展“公園-記憶の合流地点/the Park-Crossing Memories”を開催いたします。
ぜひご高覧ください。

―遊びと記憶―

友達と遊んだ記憶というのは、時に強く尊いもので、時に淡く儚いものである。そんな記憶によって色味がかった石ころは、ずっと大切にしたい宝物だったりする。友達と公園の砂場で目的もなくお城を作って、ダムを作って水を流したあの時間は、わけもなく楽しくて爽快な時間だった。そんな時に見つけたお気に入りの石ころは、今でも捨てずに大事に持っている。
今回の展覧会‘公園-記憶の合流地点’では、６名の作家たちの記憶と鑑賞者たちが合流することで生まれる新たな記憶が織り込まれた‘石ころ’を通じて、現代における時間と経験によって生みだされる価値の在り処(ありか)を模索したい。

―ある日、１人の子が公園の砂場で何かを集中して作っている場面に出くわした。そんな彼を観察していたら急に別の子が作っている子に向かって近づいていった。すると、砂場で何かを作っていた子はその子に気づいて、顔をあげて互いに顔をグッと見合わせて、アイコンタクトひとつ交わして、すぐに一緒に元々作りかけの砂の何かの続きを作り出した。
こんな場面に遭遇した自分は、自分も幼い頃、公園で出会ったどこの誰だか知らない子達と、一緒に砂場で遊んだり、他校の子とドッジボールもしたし、けいどろをしたりしたことを思い出した。公園という場所には、そういう記憶を呼び覚ます力があったし、いつかどこかの当時の記憶が、今の自分の中で呼び出されることで、新たな発見があったりする。ともだちに誘われて砂場の公園で一緒に夢中で砂のお城を作ったあの時間に時給なんて発想はなかった。 ただ楽しいからお給料がなくても時間を忘れて必死にかっこいい綺麗なお城を作ろうとした。
子供の方が記憶力がいいと言われている。それはなぜか。フランスの哲学者であるアンリベルクソンによれば、人間は歳をとるにつれていろんな知識や情報が身についてしまうが故に、自分が生き残るために必要なことかどうかを瞬時に判別した後に、不要であればそもそも記憶の引き出しに入れずに忘れてしまうそうだ。つまり、いわゆる世間でいう損得勘定という感覚は、生存本能的に元来備わっている機能なのである。
現代ではこの損得勘定というやつは往々にして経済的指標で示されることが多い。言わずもがな、我々は、資本主義という制度のもとで長らく生きてきているし、その制度に従って、ご飯を食べるし、食べるためには、お金がかかる。資本主義はエンジンとなって、社会を文明化し、発展させることに大きく貢献した。だが、現代においてその発展の裏で蓄積されてきた問題が、今僕らの世代で目の前に現れた。
その一つとして、価値ってなんだろうか、そんなことが頭をよぎる。今回は、こんな疑問からスタートした価値についての実験的な思考を実践する場として、展覧会が機能することを期待している。つまり、二つの価値、大別すれば、経済的価値と経済的価値に依存しない価値を提示する中で、価値とは何か?という問いを皆さんに発してみたい。具体的には、経済的価値を提示するというのは、通常のコマーシャルギャラリーで行われるような作家たちによる作品を販売して売上を作ることである。一方で、経済に依存しない価値というのは、作家と鑑賞者の共同作業の中で生まれた記憶によって形成された価値を提案することである。
それはつまり、思い入れのある‘石ころ’であり、他人にとってはゴミかもしれないが私にとっての宝物ではないかと思っている。
そんな宝探しを通じてあなたにとっての価値を再び考える機会となれば幸いに思う。

横手太紀

1998 年生まれ。神奈川県逗子市出身。
身の回りに存在する気に留められることの少ない物に着目し、既製品の動きを利用したギミックや彫刻的アプローチを行うことによって、それらの「野性的な側面」を浮き上がらせる。動きを持たせた彫刻やインスタレーションを中心としながら、近年は映像や写真を用いるなど表現の幅を広げている。

CV

Solo Exhibition

2022 「even a worm will turn」parcel(東京)

Group Exhibition

2023 「Body Cover」クマ財団ギャラリー(東京)
2023 「Buzzing stars」OIL by 美術手帖ギャラリー(東京)
2022 「Platform 29.8」ANB Tokyo(東京)
2022 「獣(第 1 章 / 宝町団地)」Contrast(東京)
2022 「MAPS」void(兵庫)
2022 「惑星ザムザ」小高製本工業跡地(東京)
2022 「WAVES」same(東京)、C7Cgalery(愛知)、Lian(大阪)、haku kyoto(京都)
2022 「THANK U ANAGRA」ANAGRA(東京)
2022 「KUMAEXHIBITION2022」ANBTokyo(東京)
2021 「Encounters in Paralel」ANBTokyo(東京)
2021 「P.O.N.D.」渋谷 PARCO PARCO MUSEUM TOKYO(東京)
2021 「squattin'」北千住にある革工場跡地(東京)
2021 「獣 (第 0 章 /交叉時点)」BUoY(Tokyo)
2021 「Rabbit hole peeps」ANAGRA(東京)
2020 「タウンワークス」渋谷 PARCO GALLERYX(東京)

Curation

2023 「Buzzing stars 」 OIL by 美術手帖ギャラリー (東京)

Other works

2022 「Holiday Survis」Common(東京)にて作品の展示、販売
2022 「Spiral Xmas Market 2022」スパイラルガーデン(東京)にて陶器の展示、販売
2022 雑誌 BRUTUS「NFT から骨董まで 推しアート FILE」にて作品の掲載
2022 「アート・オブ・シューズ」ABC-MARTGRAND STAGE にて作品の制作、インタビューの掲載
2021 「SUNSRIVER by MADE IN BANZAI」渋谷 PARCO BRDGE(東京)にて作品の展示、コラボアイテムの制作

KINJO

沖縄にルーツを持ち、日本と関わりの深いアメリカ文化を題材に絵画や立体、パフォーマンスを発表している。「暗闇に光る目」「シリアルパッケージ」「蛇」などの記号を、“描いて”は“消す”をくり返す作業のなかでアウトラインが薄ぼけ曖昧となり、作家自身のポートレイトのように愛嬌のある姿で「個人的な存在」に変容する。それは KINJO にとっての自画像のようなものであり、自身のルーツを掘り下げていく行為でもある。

CV

Solo Exhibition

2023 「PLACE」（Tokyo international gallery、東京）
2022 「secret sewer」（block house、東京）
2022 「Hey, River Snake C'mom」（parcel、東京）
2022 「(It forrows you）EVERYWHERE」（PACIFICA COLLECTIVES、東京）
2022 「BLIND GAZE」（台湾）
2021 「OVER THE BRIDGE」（台湾）
2021 「PEDDLER」（marco gallery、大阪）
2020 「ARAKAWA GARDENER」（OIL by 美術手帖、東京）
2020 「UNDER THE BRIDGE」（PARCEL、東京）

Group Exhibition

2022 2 人展「out of bank」（MAT gallery、東京）
2022 「GRAY AREA」（marco gallery、大阪）
2021 2 人展「RIVERSIDE POCKET」（東京

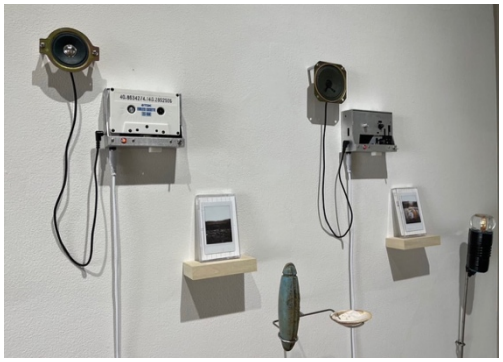
Other works

2023 やんばるアートフェスティバル（沖縄）
2021 やんばるアートフェスティバル（沖縄）

髙橋穣

東京で生まれ育った感覚から、いたる所まで切り売りされる空間や壁面への興味を持ち、上塗り されていく場の歴史に興味を持つ。作品と身体を介した関わりを通して、不可視な時間の流れを 可視化することを目標に彫刻をはじめとして映像や、パフォーマンスでの発表を行っている。 社会の変化や、鑑賞環境との関わりから作品を構成する要素は様々に変化するが、一貫して「回転と歪」「膨張と運動」への興味を持っている。

少しずつ大人に近づいて、幼い頃からの友人と再会する場面が多くなった。誰と仲良かったとか、あの先生がどうだったとか。みんなはそう言って話すけれど、僕はその大半を忘れてしまっていて、ちょっぴり悲しくなる。だけど、今も思い出せることがある。校舎裏のシュロの木の間を抜けると秘密の世界が広がっていたり、貝殻には海の音が蓄えられているだとか。それは今でもなんとなく信じてるからだと思う。想像力だけは無限だった。あの時拾った貝殻からは、まだ海の音が聞こえる。その海に連れて行ってくれたあの人はもうそばにはいないけれど、なんだか懐かしい声が聞こえるような気がする。



CV
2022「KENMA studio last exhibition」KENMA studio/ 東京
2022 東京藝術大学卒業修了制作展/東京
2022 日本橋アナーキーカルチャーセンター/東京
2021「One for ball,Ball for one.」KENMA studio/ 東京
2021「東京屋上区/ 髙橋穣・森山瞬』 四谷 TT ビル/ 東京

葭村太一

日常に溶け込んでしまった“痕跡”に焦点を当て、その奥に存在するであろう目には見えない不確かな部分から作品を制作する。忘却されゆく物の存在を彫刻や様々なメディアを組み合わせて発表している。主な展覧会に、「奈良・町家の芸術祭 はならぁと 2022」 天理市(2022 年 / 奈良) 、「34° 40’33”N 135° 29’55”E」Marco gallery(2022 年/ 大阪)個展、「Imitation or mimic」千鳥文化ホール(2021 年 / 大阪)個展、「REACTION」VOU(2020 年 / 京都)個展、「六甲ミーツ・アート芸術散歩 2019」記念碑台(2019 年 / 兵庫)など。

CV
Solo Exhibition
2022「34° 40’33”N 135° 29’55”E」(Marco gallery,大阪)
2021「Imitation or mimic」(千鳥文化ホール,大阪)
2020「REACTION」(VOU,京都)
2019「換喩生態学」(創治朗 -Contemporary Art Gallery,兵庫)
2017「積氣」(Pulp,大阪)

Group Exhibition
2022「奈良・町家の芸術祭 はならぁと 2022」(天理市,奈良)
2022「学園前アートフェスタ 2022」(学園前,奈良)

2022「オルタナティブ・ロマン」(旧住友吉左衛門茶臼山本邸土蔵,大阪)
2022「プリミティブ・コミュニケーション」(TENSHADAI ,京都)
2022「gray area」(Marco gallery ,大阪)
2022「あまがさきアート・ストロール〜Produced By 六甲ミーツ・アート芸術散歩〜」(尼崎えびす神社,兵庫)
2022「アノ ヒダマリニテ」(音ビル,大阪)
2022「STAND BY」(Marco gallery , CANDYBAR gallery,大阪,京都)(同時開催)
2021「のせでんアートライン 2021」(豊能町,大阪)
2021「下町芸術祭 2021」(神戸市長田区,兵庫)
2021「Art Drops」(スピニングミル,大阪)
2021「結から始まる起承転」(Super Studio Kitakagaya ,大阪)
2019「六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2019」(六甲山,兵庫)
2019「東京インディペンデント」(東京藝術大学,東京)
2017「F The Art World」(チェルシー,ニューヨーク)
2016「空想ミュージアム」(成安造形大学,滋賀)

Art fair
2022「3331 ART FAIR 2022」(3331 Arts Chiyoda,東京)
2022「ART TAIPEI 2022」(Taipei World Trade Center,台湾)
2022「ONE ART Taipei」(The Sherwood Taipei,台湾)
2021「ART TAICHUNG」(Millennium Hotel Taichung,台湾)
2021「OBJECT 2021」(ロームシアター京都,京都)
2021「ART TAIPEI」(Taipei World Trade Center,台湾)
2020「OBJECT」(ホテルアンテルーム京都,京都)
2020「OBJECT」(VOU,京都)
2019「ART OSAKA 2019」(HOTEL GRANVIA,大阪)

Aword
2022 アーツサポート関西 一般助成
2021「のせでんアートライン 2021」最優秀賞
2019「六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2019」公募大賞 準グランプリ
2017「F The Art World」彫刻部門 グランプリ

Media
2019 月刊美術「虫とアートの相似形」 9 月号掲載

和田 峻成

日常の中で浮かんでくる有象無象の記憶や違和感を、主に幼少期の拙いイメージを頼りに、ドローイングを起源として絵画、立体、インスタレーション、タトゥーを主とした表現形式で活動を行なっている。タトゥーアーティストとしても活動している。

KOMI

KOMI は、人間のことを球体のようだと言っていた。それはつまり、人間とは、シームレスで多面性に富んでいて、時々に合わせた側面を持つ生き物だと言っているのではないかと思う．これは KOMI 自身にも当てはまる。KOMI は、毎年決まった時期に山車を引き、スケボーをし、ラップをして、木工もする。いろんな側面を持ち合わせているが、どれも KOMI 自身なのである。こんなふうに色んな側面を持ち合わせていると、私はいったい何者なんだろうというどこかへの帰属意識というものがふっと湧いてくる時がある。

色んなところに帰属するということは、逆に、どこにも帰属していない、まるでエイリアンのような感覚に襲われる。現代において、オンラインとオフラインのパラレルワールドが行き交う中では、出どころのわからない紐があまりにも絡み合い、私はどこの誰なのかというアイデンティティにまつわる問いが幾重にも折り重なっている。

その中で、KOMI は、どこかに帰属している自分というわけではなく、あくまで自分は自分であるというスタンスでプレイしているように見える。その彼の姿勢は、スケーターであってもいいし、山車を引く人でもいいし、木工をする人でもいい、エイリアンでもいいといったようである。そんな彼の姿勢からは、我々の目の前に広がる複雑に絡まったように見える世界は、実は案外いとも簡単にほどけるようなものなのかもしれない、という気にさせられる。

Group Exhibition “公園-記憶の合流地点/the Park-Crossing Memories”

出展作家 ： 横手太紀 KINJO KOMI 和田峻成 葭村太一 髙橋穣
開催日程 ：2023 年 5 月 19 日(金)～ 6 月 25 日(日)
営業時間 ：12:00-19:00(6 月 23 日はイベントのため 18 時まで)
オープニングパーティー ：5 月 20 日(土) 19:00-22:00 (アーティストトークほか)
クロージングパーティー ：6 月 23 日(金) 19:00-22:00 (予定)
定 休 日：月,火
会　　場：Marco Gallery 1F,4F

お問合せ：info@marcoart.gallery
大阪府大阪市中央区南船場 4-12-25 竹本ビル 1F,3F,4F
Takemoto BIDG 1F,3F,4F 4-12-25 Minamisenba Chuo-ku, Osaka City, Osaka, Japan
Tel: +81 06-4708-7915 E-mail: info@marcoart.gallery